

月日が流れた。

クロフカは年をとった。

庭で駆け回ることもあまりしなくなり、散歩以外はずっと家の中で過ごすようになった。

庭の桃の木の根方には、猫のモモと犬のハナのお墓が並んでいる。

マーサおばさんは変わることなく、いつでもクロフカをやさしく撫でてくれた。

特に家の中で過ごすようになってからは、マーサおばさんのゆり椅子の脇にいつも寝そべり、椅子を揺らしながら頭を撫でてくれるマーサおばさんの手の感触に幸せと安らぎを感じていた。

「クロフカ……お前もあちこち白い差し毛が目立ってきたね……もういい年だねえ……」

マーサおばさんは、クロフカの背中や尻尾を繰り返し繰り返し、優しく撫でてくれた。

穏やかな時間だった。

やがて、クロフカの体力が、目に見えて衰えてきた。ことに後ろ足を引きずるようになった。

片目が見えにくくなった。

やがて、両の目が見えにくくなり、殆ど視力がなくなってしまった。

ナーヤさんは、幾度となくクロフカを医者に連れて行った。

獣医の先生は、クロフカのカルテを見て、目の様子を診たり、足や背

中、そして牙や耳の中を覗きながら

「もう、かれこれ十八歳になりますかね……来た時から既に成犬でしたよね……」

クロフカは、注射が大嫌いだった。

病院も、白い服の人たちも好きではなかった。

でも我慢した。ナーヤさんが連れて行ってくれるので、仕方なく我慢した。

そして、復活祭が過ぎ、明るい春がめぐってきた頃、クロフカはどうとう後ろ肢がたたなくなった。

野良犬だった頃、他所の家の農場でニワトリ泥棒と間違われ、背中をこん棒でいやと言うほど殴られたことがあった。

それが原因で、腰が立たなくなってしまったのだった。

そればかりでなく、もう体もすっかり老い込んで弱りきっていた。

もう、立っていることも辛く、その力もなかった。

それでも、マーサおばさんやナーヤさんが

「どうだい、具合は？」

とやって来ると、痛くて辛いのをこらえて、精一杯しっぽを振ろうとするのだった。

あれから、葡萄酒工場にいた白い犬のジャックもその群れたちも居なくなかった。

地主の屋敷にいたチャーコフも年老いて姿を見せなくなった。

……いとしいハナも死んでしまった。

折れ耳の赤犬も野良のブチ犬も、危険な車に乗り込んで何処かへ行ってしまった。

ムク犬のゴンも既にいない……。

…：そして今…：
うすぼやけた空を眺めながら、自分に残された時間の少ないのを感じ始めていた。

「もうすぐ、また暑い夏が来る…：その暑さには自分はまだもう耐えられないだろう…：」

「今…：今が、一番美しい心地よい季節だ…：」

ライラックの茂みの下で、空を眺めながらクロフカはそう思った。

「野良になってから、初めてゆったりと体を休めたのも、この花の下だった…：マーサおばさんに見つかって…：ミルク貰って…：ああ、此処んちでよかった…：」

クロフカは、ゆったりとため息をついた。

「此処でよかったんだ…：」

中空を見上げると、いくつもの光がふりそそぎ、自分の体がその光に包まれてきているのを感じた。

それはいつだったか、あの散歩の途中でテオおじさんに降りそそいだ、見覚えのある光である。

殆ど見えない空の中に、光が輝いてゆらゆらと舞い降りてくる。

ゆるやかな風が吹き抜けていった。

と、足元に静かな気配を感じた。

「あ……マーサおばさん……」

「クロフカ……具合はどう？ ご飯食べるかい？ お前の好きな肉のスープご飯だよ。熱すぎないように、少しフーしてきたからね」

マーサおばさんは、ライラックの根方に横たわっているクロフカの傍にやって来た。

手には、柔らかな湯気の立つ温かいクロフカの食餌を持って……。

つづく